

## 地味チョウシリーズ⑭

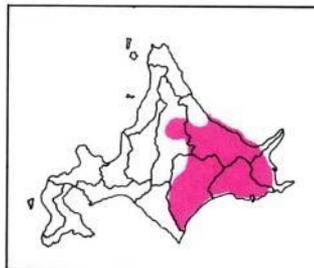
チャマダラセセリ

*Pyrgus maculatus*



# はじめに

前回に続いてチャマダラセセリも地味チョウではないかもしれませんが、小さくて目には止まりづらいのですが、よく見ると実に可愛らしく美しい。今回も大学入学まではほとんど未知の蝶なので、観察記録は北大虫研～「道新本」の頃からになります。右は「道新本」の図版ページ。翅を広げた♀は1975年丸瀬布で私が撮影したもの。吸水のかわいいのは1978年音更で相棒辻氏が撮ったもの。「道新本」は幼生期の写真が充実していることで評価されたのですが、チャマ君の幼虫は1985年に忠類村で辻氏が撮った1コマのみ。翌年の春に出版ですからぎりぎりセーフで間に合ったものです。そのころは同属のヒメチャ騒動に明け暮れていたし、道東の蝶(下図は道新本の分布図)なので夏の幼虫探しはいろいろな意味でハードルが高かった気がします。本当はヒメチャ君のことを知るためにも大切な兄弟なのですが...[言い訳] 今は全国的に急激に姿を消している蝶で、私も気を引き締めて生態記録を取っている次第。では、北海道での現状報告です。



▲吸水する♀ (1975 7 6 網走管内丸瀬布町武利)



▲吸水するチャマダラセセリ  
(1978 6 2 十勝管内音更町十勝川温泉)



▲葉中の終齢幼虫 (1985 8 9 十勝管内忠類村)

## はじめに2

私がチャマ君の幼虫に出会ったのは、相棒の情報から、1987年9月4日音更の十勝川温泉に近い丘陵地です。「完本」をつくる時に古いポジをゴソゴソ探していて発見したものです。こんな時期ですから特にねらいに行ったわけではなく、何かの出張の帰りに寄ったのだと思います。今から40年近く前のことなので記憶は定かではありませんが、写真①はキジムシロに造っていた巣を開けた所、②、③はキイチゴの仲間の巣のようです。ナワシロイチゴかエビガライチゴ、赤い実をつまんだ記憶があるからです。これらよりおいしいクロイチゴは黒い果実になります。食の記憶の方が鮮明というのは情けないのですが、この後しばらく空白の20年が過ぎていきます。

①巣の中の終齢幼虫 1987・9・4 十勝川温泉



②*Rubus*(キイチゴ)属の巣 1987・9・4 十勝川温泉



③巣の中の終齢幼虫 1987・9・4 十勝川温泉



# 観察記・標茶編

チャマ君もカラタカ君同様に標茶の3年間でずいぶん親しく付き合うことができました。初めての出会いは、カラタカ君同様2007年6月17日の五十石でした。道端にちよろちよろ飛んできて、なんと目の前で卵を産んでいきました。産み付けたキジムシロは小指の先ほどのごく小さな株。へえー。この卵はお持ち帰り。さらにこのメス(写真のメス)もお持ち帰りにして産卵させてみることにしました。



日光浴



クローバーで吸蜜

キジムシロの小さな株に産卵 2007年6月17日 標茶五十石



ヒトフサニワゼキショウで吸蜜



産付された卵

持ち帰った♀を飼育ケースに食草と一緒に入れると20数卵産んでくれました。孵化した幼虫はキジムシロの葉に糸を掛けその中に首をまげて静止します。この形はヒメチャと同じでした。葉の表面を舐めるように食べます。脱皮を重ねるうちに巣は葉を折りたたむスタイルになっていきます。7月末に3齢になったころ、近くの公園に植えてあったキンロバイを失敬し与えてみるとヒメチャと同じような巣をつくり食べています。8月中頃から餌が足りなくなりダイコンソウやキイチゴの葉も与えましたが食べてくれました。ヒメチャと同様結構広食性です。9月に入り20個ほどの白い蛹ができました。

## 標茶 飼育編

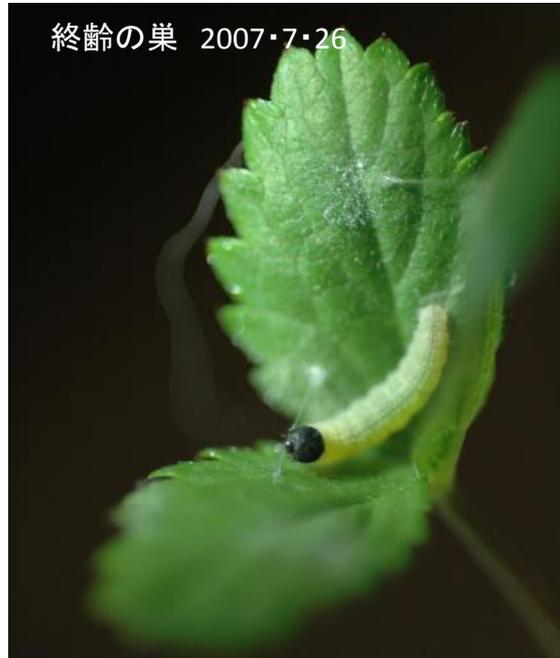
終齢の巣 2007・9・1



若齢の巣 2007・7・1



終齢の巣 2007・7・26



蛹 2007・9・1



# 標茶飼育編2

蛹をそのままケースの中に放置していたのですが、9月中旬(17日)から次々羽化し始めました。ありやりや、本州では2化するのだからね～。しかし9月に入っているから大丈夫と思っていたのですが…。展翅してみると後翅の外側の白点列が出ない特徴がありました。2化は7個体に留まり、あとの13個は越冬に入りました。標茶は冷え込むので冷蔵庫保管とし5月から外に置いておくと5月24日から羽化が始まりました。羽化した個体は白斑が立派な1化タイプですが1頭だけ2化タイプのがいました。どうしたのでしょうかね。

羽化した1化タイプ個体 2008・5・24



羽化した2化タイプ個体 2008・5・24



その年の秋に羽化した2化個体たち

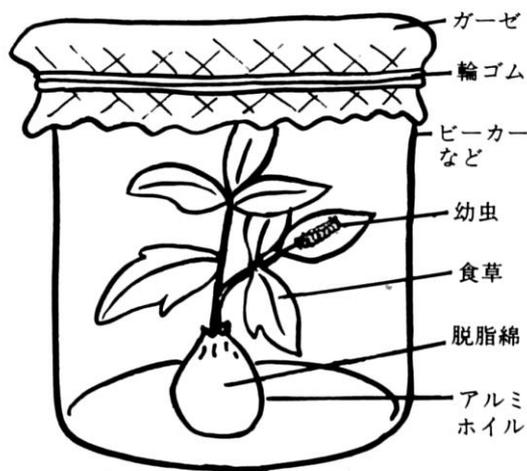


翌春に羽化した個体たち 2化タイプ ↗

# 飼育方法の進化

話は生態記録からは外れますが、この標茶でのチャマ君の飼育経験は、その後ヒメチャの域外保全活動の他、いろいろな場面で活かされることになりました。飼育の方法が進化したのです。「道新本（1986年発行）」の飼育についての解説では左下のような方法をおすすめしています。それが「フィールド版（2020年発行）」では右下図です。今私のお気に入りには図の「吸水スポンジ」：オアシスです。このスグレモノは標茶時代に出会いました。チャマ君の飼育では彼らは食草に巣をつくるので、食草をなるべく長持ちさせなければいけません。そこでオアシスなのです。オアシスとの出会いは、高校の「園芸デザイン」という科目を見学していた時でした。講師のフラワーアレンジメントの先生が、生け花をこのオアシスに挿していました。私は「おおっこれだ」と直感しました。「生け花」が転じて「フラワーアレンジメント」生け花の「剣山」が「オアシス」に進化していたのでした。そういえば、高校生の時だったか剣山に食草を刺して飼育していたら幼虫たちが剣山の受け皿の水に次々入水していった苦い経験がありました。オアシスならそんな自殺者は出ないのです。これは使えますよ。ちなみにオアシスの受け皿は牛乳パックの底を使うとこれがまたいいのです。

\*ちなみに【オアシス】は百元ショップで購入できます。



「道新本」の飼育方法のイラスト



「フィールド版」の飼育方法のイラスト

# 標茶での観察追記

標茶の五十石林道での観察の追記です。2015年「完本」制作が本格的に始まった年です。最初の取材先は芝田さんから教えてもらった帯広の河川敷では空振り、8月に入り相棒の辻氏との道東めぐりで、あそこにはまだいるだろうと再訪したのです。記憶を呼び覚ましながら林道を見回り1頭の終齢幼虫を発見しました。「完本」では野外幼虫の写真はこの1カットだけで、後は以前の飼育写真でカバーしました。久しぶりの相棒との撮影旅行ではチャマ以外にも課題の撮影を楽しく進めることができ、相棒も定年後のやる気にますます火が付いたようでした。



五十石林道にて  
2015・8・9

狸も幼虫探し



無事に終齢幼虫が見つかった



標茶塘路湖畔にて

# 音更での観察記録①

「完本」発行後の観察記録です。相棒辻氏の北海道撮影行はヒメチャも含めますます頻繁になり、地元の私よりも次々に成果を上げていきました。チャマに関しては音更町周辺にいいフィールドを開拓していました。2017年の夏にそこに行ってみました。アカマダラがわんさかいたり、ミヤマセセリの巣もあつたり、水路周辺の落葉樹が伐採された跡地のようです。教えられた崖でチャマ幼虫を難なく見つけました。キジムシロの葉を綴ってまもなく蛹化しそうでした。そこでその株3箇所をネットで覆って蛹化まで追跡してみることにしました。

終齢幼虫の巣 2017・8・23 音更



巣の中の終齢幼虫 (同)



巣をつくる終齢幼虫 (同)



終齢幼虫のいる株全体をネット掛けに

# 音更での観察記録②

2017年音更の続きです。9月17日そろそろ蛹になっているだろうと行ってみました。キジムシロの周りにはイラクサが生い茂って来ています。そいつを刈り払ってネットを開けてみます。怪しい枯葉を開けてみるときれいな蛹が飛び出しました。枯葉がカールしている中に入り込んで周辺を吐糸で結び付けてあります。なるほど、こんなところで蛹化するのだろうと、次のネットを開けるとやはり同じような枯れ葉が。中を開けると緑色の幼虫の姿があります。これは前蛹でした。持ち帰ると2日後に蛹になりました。おおむね9月中旬に枯葉を綴って蛹化するということがいいのかな。



蛹ネット(百均の食卓カバー)



この枯葉が怪しい



巣の中に終齢幼虫？



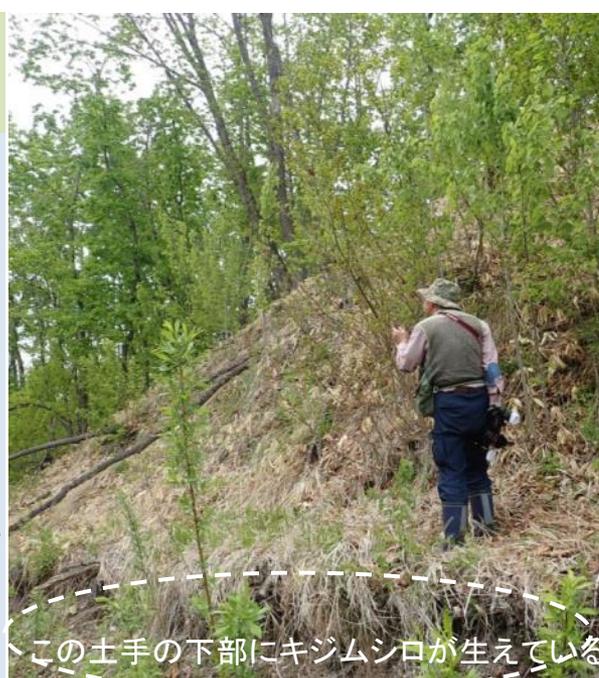
枯葉の中の蛹 2017・9・17 音更



巣の中の前蛹

# 音更での観察記録③

音更のフィールドはアカマ・エゾヒメシロなども飛んでいます。前回の蛹回収ではミヤマセセリの幼虫をけっこう見つけたのでそれも追跡しています。そんなことで2018年にも出かけました。アポイのヒメチャ調査の行きがけに寄っています。5月23日に相棒と行ったときにはキジムシロの卵や1齢幼虫を見つけてはタグでマークしておきました。6月16日に行ってみると1~2齢幼虫がいました。折りたたまれた巣もあります。葉の表面に糸を掛けたタイプもありました。7月11日にも立ち寄ったのが最後の確認となりました。2019年も行ってますが土手のキジムシロは周辺の草木に覆われてチャマ君も消えてしまいました。



この土手の下部にキジムシロが生えている



相棒と卵を探す 2018・5・23



タグと若齢の巣 2018・6・16



若齢の巣と卵殻 2018・6・16



1齢幼虫 2018・6・16

# 十勝が丘観察記①

音更のフィールドがダメになってからアポイヒメチャ調査の行きがけに教育大旭川のA先生が開拓した十勝川温泉の北側にある高台(十勝が丘)のフィールド通いが続きました。行ってみると植林地のあちこちに、実に気持ちのいい草原(地)環境が広がっています。チャマが本州ではあちこちで絶滅しているのは草原環境が維持できなくなっているからと言われています。放牧地では定期的な草刈り・火入れなどで草原が維持され食草のキジムシロ・ミツバツチグリが生育できていたのが「手入れ」不足で草原から森林に移行してしまうと絶滅するといいます。この十勝の丘は植林地で定期的な伐採という「手入れ」が入るので伐採後の草地が入れ替わり生じそこを移ろいながら生き延びているようでした。「手入れ」が必要な草地の蝶、ヒョウモンモドキの仲間も同じように絶滅しているようです。音更周辺ではチャマの他カラフトヒョウモンも同じ運命をたどったようです。この十勝の丘ではどうなのかその環境変化を見ていくことにしました。



十勝のフィールドにて 2020・5・15

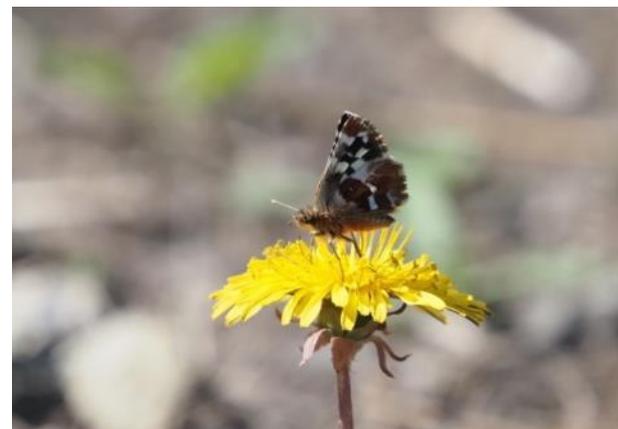
ここのチャマ君はなんだか幸せそうに見えます 2020・5・15



# 十勝が丘観察記②産卵

十勝は春も「十勝晴れ」続き日中は暖かく蝶の発生は早い地域です。5月に入るとうかうかできません。ヒメチャもそうですが雪解け後いち早く早春の花たちと共に発生する蝶だどつくづく感じます。背たけが高い他の草本が伸びる前の、枯草で地面が被われているような環境が大好きです。地面にたっぷり陽射しが入る「空き地」に食草がポツポツ顔を出している環境に依存しています。産卵を見ているとそのことがよくわかります。メスは羽化するとすぐに交尾し、吸蜜し、産卵行動に入ります。産卵するのは食草なのですが、とりわけ小さな株の葉裏を探します。この辺はヒメチャと全く同じです。下の写真はそのことを示しています。産んでいる♀の周辺には大きな葉に育った株があるのですが、そこは嫌います。地面くつつくような極小の葉の裏に産み付けるのです。

小さな葉を選び産卵 2020・5・15 十勝が丘



タンポポで吸蜜 2020・5・15 十勝が丘



産付された卵

# 十勝が丘観察記③

十勝が丘はチャマのマイフィールドになりました。2020年の生息環境地の写真①～③を載せます。一番数が多かったのは①の草地です。広々とした装置を飛び回っていました。②は周辺は低木が育ち始めている窪地でチャマの密度としては最も高い場所で前ページの産卵場所です。③は②の向かい側にある斜面で伐採された直後のようです。重機が入り人工更新が進むように下草がかなり除去されています。一部にセイヨウタンポポとミツバツチグリが侵入して来ています。それぞれに付近にいたチャマの写真もいれました。気を付けてみていないとすぐに見失います。枯草の上にとどくとどこにいるのかわからなくなります。さてこのような植林地は毎年環境が変わって(遷移して)行くのです。これがチャマ君の生息地の特徴のようです。

①伐採後に放置されている草地



②伐採後にミツバツチグリ・キジムシロが広がる草地

③伐採直後の「地がき」された場所



# 十勝が丘観察記④

十勝が丘の変化を紹介します。右の写真は、2020年がベストだった前頁の②の2023年7月3日の写真です。草木が生い茂っているのがわかると思います。この日は幼虫探しです。夏草の中に顔を出しているミツバツチグリの上部に巣がありました。中を開けると4齢のようです。ずいぶん成長が速いようです。草丈の低い所を探していると湿ったところで新食草を見つけました。ミツモトソウです。この後前頁の①のところに行ってみると、しばらくどこかわからないくらいに草木が伸びてすっかり環境が変わってダメになっていました。写真③の地がき後はワラビが繁茂してミツバツチグリなど食草はほとんどありません。3年ですいぶん環境は変わるものだと驚きました。



幼虫を探す 2023・7・3 十勝が丘



ミツバツチグリの4齢幼虫



新食草ミツモトソウの巣



左の3齢幼虫

# 忠類での観察から～生息地の移動①～

アポイヒメチャ調査の前後には、十勝が丘の他、忠類周辺をカラフトヒョウモンと共に探しました。ここもカラマツやトドマツの植栽地です。植林地には看板が立ててあり、いつ植林したものがわかります。下のABの写真は同じ場所で、看板から2017年に植林したことがわかります。植栽して3年後の2020年(写真A)にはあちこちの空き地にチャマとカラフトヒョウモンが見られました。その3年後の2023年(写真B)には両種とも見られなくなりました。写真Cの区域も2017年植栽地ですが2020年には植栽列の隙間にいたのですが、2023年にはそこは消えて左側の溝地に移動していました。

2017年の伐採地が6年後の2023年には木が伸びて棲めなくなったようです。2023年に一番多かったのは写真Dの場所で2022年植栽地と看板にあります。「地がき」後2～3年ででしょうか。明るい草地で、ミツバツチグリが繁茂し、植林地の隅にスミレ類もありカラフトヒョウモンも見かけました。チャマ君はこの植林地で、伐採後の明るい草地に増えてくるミツバツチグリやキジムシロを追いかけられるように、生息地を移動しながら生き延びていることがわかってきました。



2017年植栽地 2020年6月



2017年植栽地 2023年6月



2017年植栽地 2023年5月

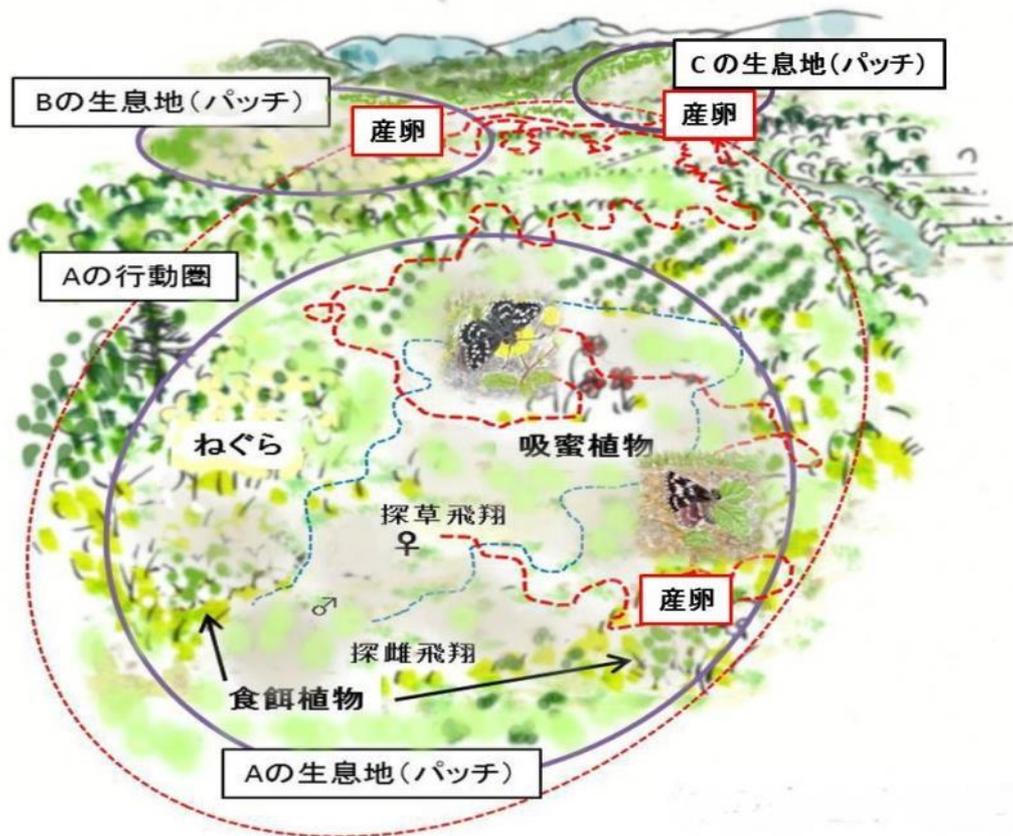
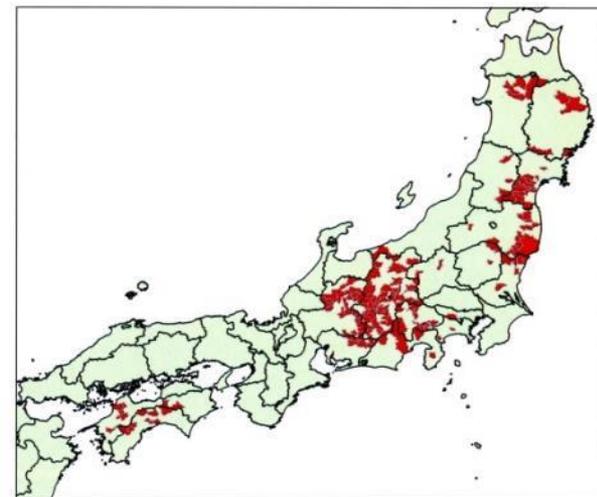


2022年植栽地 2023年5月



# チャマの生息を支えるもの～まとめにかえて

チャマ君は今全国的に絶滅のピンチにあります。蝶類保全協会の2023年号を「チャマ特集号」見て愕然としました。それにとると本州の生息地(右図)のほとんどすべてが絶滅しているといえます。岩手で、愛媛・長野・福島・・・各地で協会の方々を中心に生息環境の維持のためササ刈りや人工交配などなど必死な取り組みも叶わずどんどん絶滅してしまっているのです。その中で言われているのが「生息地のネットワーク」が必要だということです。これは蝶の保全を語るときに必ず出てくることですが複数の各生息地(パッチ)間での交流ができなくなると蝶はいなくなってしまうということです。



左の図で説明するとチャマ君はAの生息地(パッチ)1か所だけを完璧に保全しただけではダメで蝶が赤ラインのようにBやCのパッチに移動交流ができないと消えてしまうということです。

そもそもチャマ君が棲む草原環境は本来どういう所だったのでしょ？日本に存在する草原環境は、高山や湿地を除けば火入れや草刈りによって保たれている人工草原です。放っておけば雨が多い日本では森林に遷移してしまうのです。チャマ君は、放牧地での火入れや萱場の草刈りなど人間の手が入る、いわゆる里山環境に適応し生きてきたといえるのかもしれませんが。しかし、里山を維持する農村は過去のものになりつつあります。畑地周辺の土手の草地も最近では牧草が張り付けられたり農薬で生息地は消えているようです。明るい未来は見えては来ません。

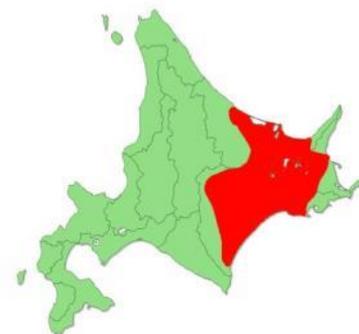
# おわりに

右の図は「道新本(1986)」と「イラスト本(2025)\*」のチャマ君の本道の分布図です。大きくは変化していないようですが、十勝が丘と忠類での生息の様子を紹介しましたが、各地域の実際の分布密度はどのようなのか、本当に今でも生息しているのか自信はありません。昔見た丸瀬布や標茶の林道には今もいるのでしょうか？林道沿いの草地は最近は外来の牧草やオオハンゴウソウなどがはびこっているように見えます。湿原周辺や火山性草原などにはメガソーラーが次々建てられてきています。やはり一番の頼りは低山地の植林地なのかもしれません。各地域の森林組合にはぜひ頑張って山仕事を続けて行ってもらいたいと思います。

今、富良野では小中高生に「森林学習プログラム」という授業を進めています。東京大学の演習林で森林生態系を理解してもらいながら山仕事も大切なんだぞと伝えています。それがチャマ君の保全につながっているのかと思う今日この頃でした。 《おわり》



道新本 1986年



イラスト本 2025年



\* 北海道の蝶の生活史図鑑 蝶好きの12か月



東京大学演習林での森林学習